



食た、なり上り者奴、人の魔杖を盗んで置いて、
知らぬ顔で榮華を極めて威張り散らすこは腹が立
つ、エ、残念た、折角彼奴に會ひ乍ら、見すく
取り逃がすとは口惜しい」と魔法つかひの乞食は
齒齧みをしてブル／＼震えましたが又思ひかへし
て、

「イヤ／＼、斯う云ふ様になつたのも元はこ云へ



ば彼様魔杖杯持つて居たからた神様の道を外れた
魔法つかひ、彼様杖で思ふ事爲す事氣儘の放題で
ありとあらゆる此世の快樂に耽つたのが、思へば
俺の罪過たつた、幾ら自由の利くあの魔杖も人に
取られてしまつたら、後に残るは空計だ、良心
の責苦計た、あゝ俺が悪かつた、あんな杖はあの
乞食のやうな恩知らずの畜生にも劣る無慈悲な奴



の持つものだ、それにしても神様の悪口を云つたり、聖人の某を俺の敵杯と咀つたのが耻しい、恐しい、」と今度は自分の罪を悔み乍ら身を戦はしてホロ／＼と豆粒のやうな大きな涙を流しました。處へ又誰か人がやつて来る様子、魔法つかひの乞食は恐る／＼。

「實に罪深い乞食でございます、罪深い……」と

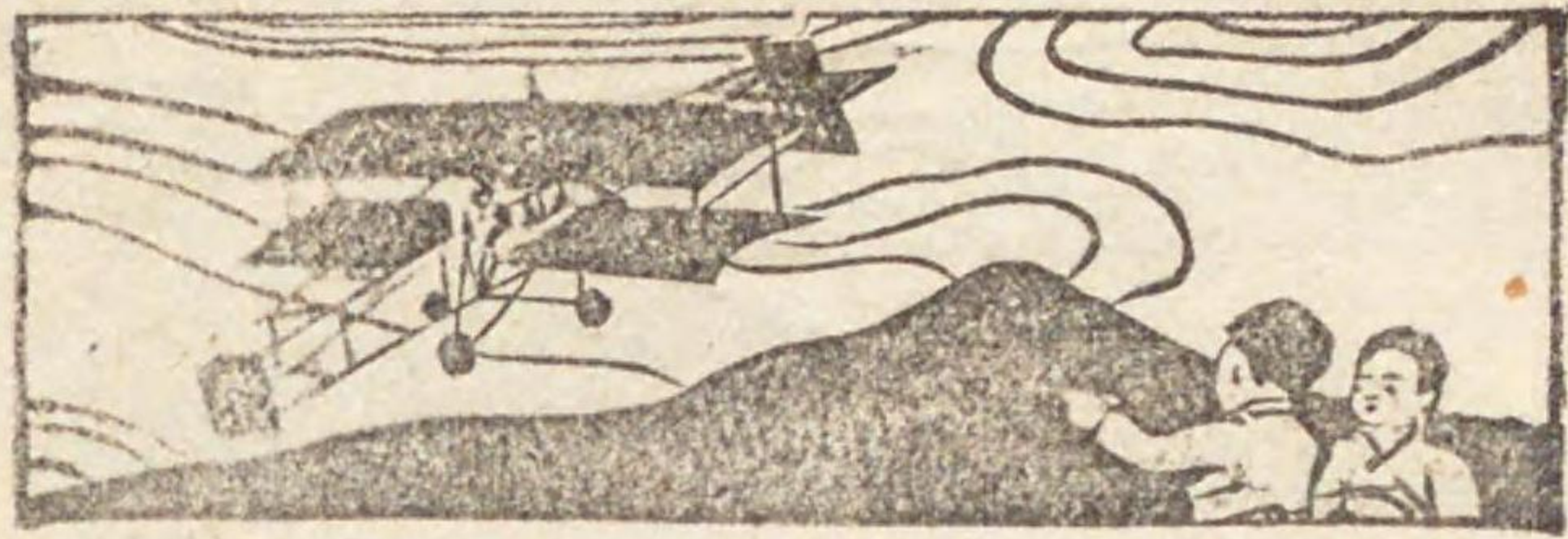


思はず斯う云つて、食を乞ふ事杯は忘れてしまつて居ました。

其人ご云ふのは聖人でありました。

聖人は其乞食の様子を見て、不審に思ひ、

「コレ／＼、お前は今罪深い乞食ご仰つたが、それには何か仔細があるのか、云つて聞かして下さらぬかと」親切に問はれまして、



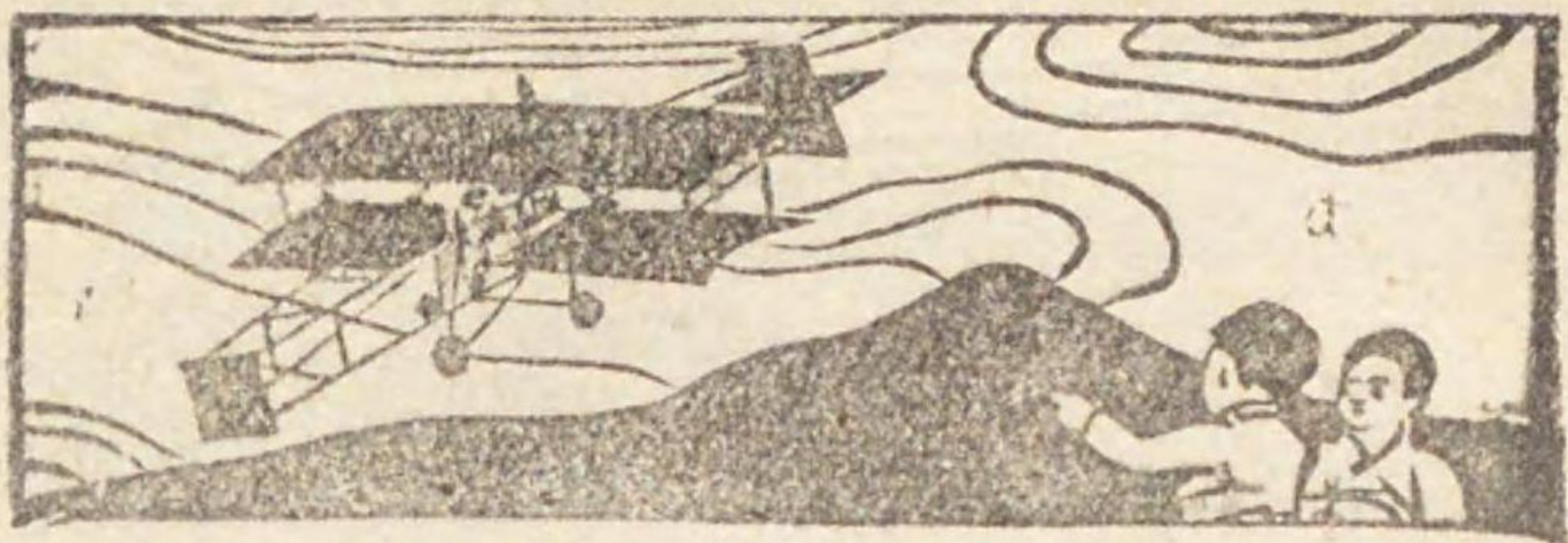
「難有うムいます」ご乞食は顔を上ますと、聖人の方は知つて居られませんが、魔法つかひの乞食はよく／＼知つて居りますので。
其顔を見るや吃驚いたしまして、
「アツ」ご云つたなり氣を失つて倒れてしまひました。

聖人は扶け起して介抱して、さて委しい事情を



聞きました後、

「よし／＼、安心なさい、たごへ今迄お前が魔法つかひであつても、それ丈の良心と、正直な心と罪を悔む心とがある以上は、お前は未だ決して本統の魔法つかひぢやない、よし／＼安心なさい私に考があるから」
ご少し計の食物を與へ親切に勞はりました。



乞食は又熱い涙をホロ／＼と落しました。

話變つて彼の成上りものゝ乞食は魔杖のおかけで散々浮世の快樂を盡し豪奢を極めて天下無敵の有様でありました。

ある日二頭立の黒塗馬車へ乗つて自分の家の門前で立下りますと、其處に一人の見すほらしい乞食が居りましたが、元より恩知らずの成上りもの



事ですから物を恵む處か突然大聲で、

「オイ其塵汚い形をして人の門前に居つてはならん、何處かへ行つてしまへ」と怒鳴りつけ乍らハツタと足で蹴りましたが、不思議／＼俄かに其持つて居る魔杖がポツキと二つに折れると思ふと、成上りものゝ姿は忽ち汚い元の乞食に化つてしまいました。

(をばり)

明治四十五年二月
明治四十五年二月
十八日
印刷
發行

【定價廿五錢】

編纂者 小伽研究會

發行者 鈴木與八

印刷者 伊藤勝次郎

印刷所 伊藤活版所



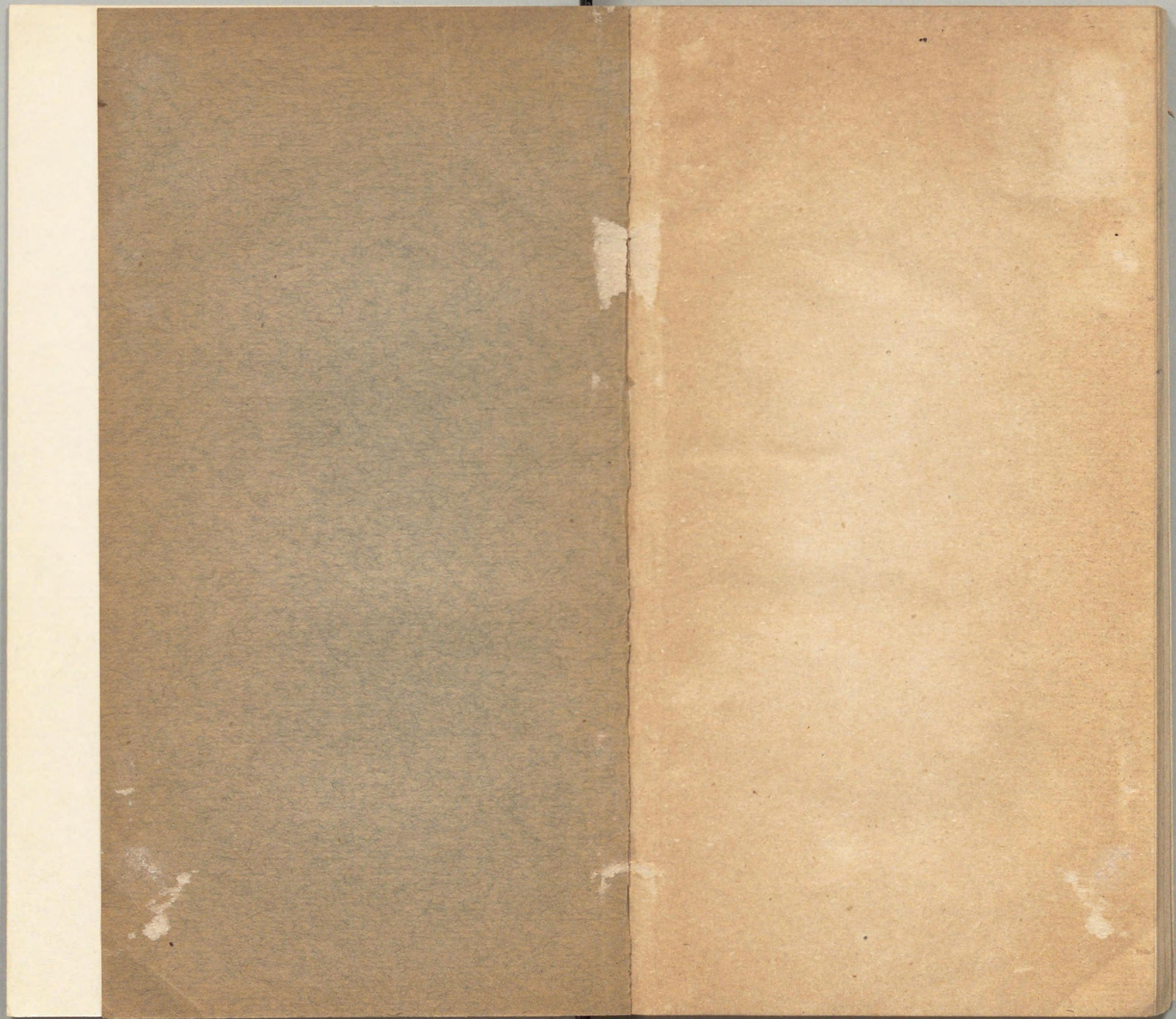
發行所

東京市淺草區南
元町廿八番地

盛陽堂

振替口座東京一四七〇六番

268
750



과 21-37



